

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02332

研究課題名(和文)比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築

研究課題名(英文) Reconstruction of the proto language of Japanese and Ryukyuan and phylogenetic trees based on comparative linguistic methods

研究代表者

五十嵐 陽介 (Igarashi, Yosuke)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・教授

研究者番号：00549008

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要(和文)：フィールドワークを通じたデータ収集とその公開を広範に行った。公開された資料には、日琉祖語に遡ると考えられる同源語のリスト『日琉語類別語彙』、諸方言のアクセント資料、方言辞典が含まれる。日琉祖語の再建に関するシンポジウムを計2回開催した。日琉諸語の歴史が比較言語学、統計学、人類学の観点から多角的に議論された画期的なシンポジウムであった。1回目のシンポジウムの研究成果は書籍として出版した。プロジェクトによって拡充された方言データを分岐学的手法を用いて分析することによって、日琉諸語の系統樹を提案した。この系統樹では2つの単系統群、「拡大東日本語派」と「南日本語派」が定義される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、既存データと方言調査から得られたデータを、方言学、文献学、日本語史の正確な知識に基づいて構造化したデータベースを用い、日琉語族の系統研究を行う最初のものであり、日本語・琉球語比較言語学に対し画期的な発展を促すものである。研究の結果に基づいて提案された系統樹は「本土対琉球」という言語学の通説を覆し得るものであり、言語学のみならず日本列島の歴史を扱う種々の研究分野に対して大きな波及効果をもたらす可能性がある。

研究成果の概要(英文)：Extensive data collection through fieldwork was conducted and made publicly available. Published materials include "JR-COGNATE," a list of cognates thought to date back to proto-Japonic, materials on accents of various dialects, and dialect dictionaries. Two symposiums on the reconstruction of proto-Japonic were held. These were groundbreaking symposiums in which the history of the various Japonic languages was discussed from multiple perspectives, including comparative linguistics, statistics, and anthropology. The results of the first symposium were published as a book. By analyzing the dialectal data collected by the project using a cladistic analysis method, we proposed a phylogenetic tree of the Japonic languages. This phylogenetic tree defines two monophyletic groups, the "Extended East Japanese branch" and the "South Japanese branch".

研究分野：言語学

キーワード：歴史言語学 比較言語学 少数言語 琉球語 系統論 系統樹 方言 日本語

1. 研究開始当初の背景

日本列島の諸方言、特に本土の諸方言が、祖語からどのように分岐して現代の姿に至ったかを明らかにする系統研究はこれまでほとんどなされていない。方言の分類法として広く知られる「方言区画論」によると、日本列島の諸方言は琉球方言と本土方言とに大別されるという(東条(編)1953)。この分類法は、目立った言語特徴に着目し、その表面的な類似性に基づいて方言を分類するものであり、言語変化の過程を再建することを目的としていない。一方、日本語学で支配的である言語地理学は、言語変化の過程を再建しようとする試みのひとつであるが(徳川1993)、この枠組みで扱えるのは、主として言語特徴の伝播すなわち借用の過程である。したがって言語地理学的手法を用いて再建できるのは、列島全体に日本語系統の言語が拡散し個々の方言が形成された後、すなわち祖語から諸方言への分岐が繰り返された後の比較的最近の歴史に過ぎない。

それに対して、分岐学的手法に基づいた比較言語学では、借用による類似性は排除される。ここでは、諸方言が祖語から受け継いだ特徴すなわち古形の保持(retention)と、変化の過程で新たに獲得した特徴すなわち改新(innovation)とが区別され、改新を共有する諸方言が系統的な分類群として認められる(Atkinson & Gray 2005)。言語変化の過程は系統樹の形で表現される。比較言語学では文献以前(奈良時代以前)の歴史を再建することが可能となる。

比較言語学的手法に基づいて諸方言の歴史を解明しようとする試みは、その数は少ないながらも存在する(Pellard 2015)。その研究成果によると、日本列島の諸方言は日琉語族をなし、日琉語族は琉球列島の諸方言すべてからなる琉球語派と、本土の諸方言すべてからなる日本語派の二大系統群に大別されるという。琉球列島の諸方言と本土の諸方言とに大別される点において、これまでの系統研究は、方言区画論による分類法と一致している。

従来の比較言語学的系統研究には以下の問題を指摘できる。

問題(1) 日本語派に属するという諸方言間の系統関係が全く不明である。

問題(2) 本土の諸方言すべてからなる系統群(日本語派)が存在する根拠が示されていない。

問題(1)は、従来の系統研究が琉球語諸方言を中心に扱っており、日本語(本土)諸方言をほとんど扱ってこなかったことに起因する。問題(2)は、「日本語諸方言はすべて奈良時代ないしそれ以降の近畿地方の方言(中央方言)の末裔である」とする、日本語研究界に根強い見解に起因していると思われる。しかし、服部四郎氏が1976年に示唆しているように(服部1976)、奈良時代にはすでに、琉球語が他から分岐していただけでなく、本土の言語も、少なくとも東国方言、九州方言、中央方言へと分岐していた可能性が高い。このような日琉語族の歴史を解明するためには、文献以前の歴史を遡ることができる比較言語学的手法を用いることが不可欠である。

比較言語学的研究の更なる発展のためには、日琉祖語に遡る同源語のリストを作成し、それに対応する琉球語・日本語諸方言データを収集すること、そのデータを系統研究に有用な形で構造化した大規模な電子データベースを構築すること、そしてそれを分岐系統学的手法で分析することが有用である。

2. 研究の目的

本研究は、分岐系統学的観点を導入した比較言語学的手法に立脚して、日本語・琉球語の祖語(日琉祖語)の再建を行うとともに、諸方言の系統関係を解明し、日琉語族の系統樹を構築することを目的とする。

3. 研究の方法

A) データベースの作成

日琉祖語に遡る語の電子化データベースを作成する。データベースは既存の方言・古語辞書のデータと、新たに行う方言調査からのデータからなる。すべての項目は、比較言語学的分析に必要な情報(語形と意味のほかに同源性の情報)が付与され、3種の情報に基づいて統一的に検索可能なように構造化される。

B) 比較言語学的分析

分子生物学で用いられる分岐系統学モデルを応用した手法に基づいて系統樹を再建する。近年欧米を中心に行われている比較言語学的研究は、分子生物学で用いられている統計的手法を、言語の系統研究に応用することによって成果を挙げている(Atkinson & Gray 2005; Gray &

Atkinson 2003; Bryant et al. 2005; Lee & Hasegawa 2011;) 分子生物学における系統モデルは、高度の計算アルゴリズムに基づく大量データ処理に特徴づけられる。これまで様々なモデルが提案されているが、そのうちのひとつは、系統発生による言語の分岐と伝播(借用)による言語の収斂とを統合して系統樹を構築することができる(Bryant et al. 2005)。伝播の過程を解明する従来の言語地理学からの知見と比較言語学からの知見とを統合させることができる点でも、この手法は有用である。

4. 研究成果

(1) フィールドワークを通じたデータの拡充と公開

フィールドワークを通じたデータ収集とその公開を広範に行った。方言データを拡充するための指針となる調査語彙票には、日琉祖語に遡ると考えられる約1,300の同源語のリスト『日琉語類別語彙』(五十嵐 2006b)と、九州諸方言と琉球語諸方言のみが共有する同源語のリスト『九州琉球同源語調査票』(五十嵐 2017a)が含まれる。前者は、アクセント型の対応に基づいて諸方言の系統樹を構築するために利用される調査票であり、後者は琉球語と九州方言とが姉妹関係にあるとする仮説を検証するための調査票である。

公開された諸方言データには、例えば『日琉語類別語彙』を利用した、熊本県天草市本渡方言のアクセント資料である松浦(2020; 2021ab)に加え、愛知県新城市方言、静岡県浜松市東部方言、島根県出雲市大社方言、島根県安来市広瀬方言のアクセント資料である平子(2018a)、尾張木曽川方言のアクセント資料である(平子 2020b)、埼玉県旧入間郡方言のアクセント資料である平子他(2019)がある。さらに、国立国語研究所のプロジェクトとの共同研究となるが、南琉球宮古語池間方言の方言辞典(仲間・田窪・岩崎・五十嵐・中川 2022)などがある。

(2) シンポジウムの開催

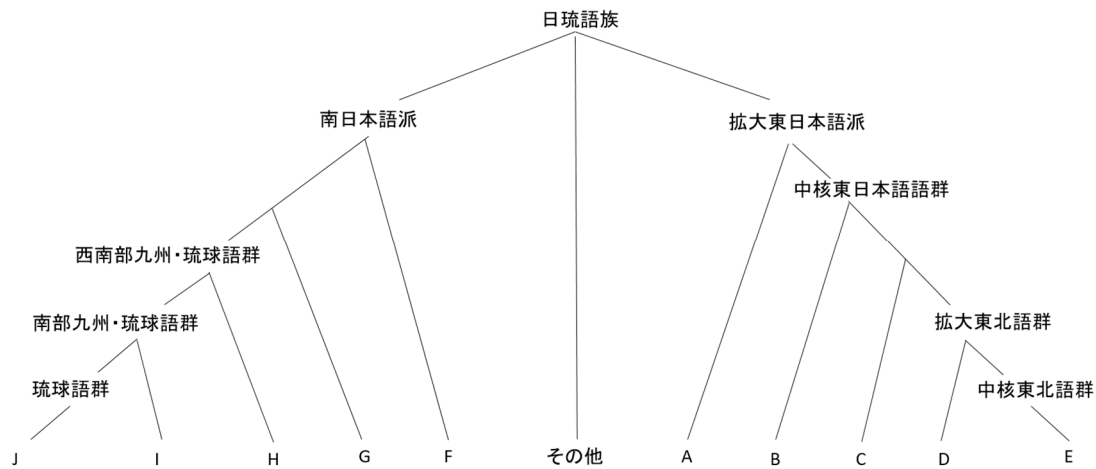
日琉祖語の再建に関するシンポジウムを計2回開催した。1つ目は、平成30年12月22日から23日の2日間にわたって、国立国語研究所プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」との共催で開催した、公開シンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」である。発表者およびディスカッサントは、国立国語研究所、福岡大学、オークランド大学、コーネル大学、琉球大学、千葉大学、立命館大学、慶應義塾大学、フランス国立科学研究センター、一橋大学それぞれに所属する、日琉諸語の歴史を現在第一線で研究している研究者であった。専門家が一堂に会する場で日琉語族に属する諸言語・諸方言の系統関係が議論されたのは恐らくこれが初めてであり、画期的なシンポジウムであった。

2つ目は、令和2年12月に国立国語研究所プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」、科研費プロジェクト「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」、「日本語と関連言語の比較解析によるヤポネシア人の歴史の解明(新学術領域「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」計画研究B02班)」、「日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて(新学術領域「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」公募班)」との共催で開催した、公開シンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」である。発表者およびコメンテーターは国内および国外(フランス、オーストラリア)の言語学者、遺伝学者、自然言語処理研究者であり、日琉諸語の歴史が比較言語学や統計学の観点から多角的に議論された。

シンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」の研究成果は、書籍『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』(木部他(編)2021)として出版した。

(3) 系統樹の構築

研究のたたき台として本プロジェクトの開始前に提案した系統樹(五十嵐 2016a)をもとに、『日本言語地図』(LAJ)のデータの一部を分岐系統学的手法で分析することで得られる系統樹を提案した(五十嵐 2017b)。この系統樹は、九州諸方言と琉球語諸方言からなる「南琉球語派」、八丈方言と東日本諸方言を含む「東日本語派」と「その他」からなる。プロジェクトによって拡充された方言データに基づいて、この系統樹を改訂した結果を五十嵐(2018ab)で発表した。プロジェクトの最終成果として提案した系統樹は図1の通りである(五十嵐 2021)。



A	岐阜県、愛知県の言語
B	静岡県西部、長野県南部、八丈島の言語
C	長野県北部、新潟県上越・中越地方、山梨県、静岡県東部、伊豆諸島北部、群馬県、埼玉県、東京都、神奈川県、千葉県言語
D	茨城県、栃木県の言語
E	新潟県下越地方、福島県、宮城県、山形県、岩手県、秋田県、青森県の言語
F	福岡県豊前・筑前地方、大分県の言語
G	宮崎県中北部の言語
H	対馬、福岡県筑後地方、佐賀県、長崎県、熊本県の言語
I	鹿児島県、宮崎県諸県地方の言語
J	琉球列島の諸言語

図1 五十嵐(2021)が提案する日琉諸語の系統樹

この系統樹では2つの単系統群、「拡大東日本語派」と「南日本語派」が定義される。これらはいずれも非中央語系諸言語である。拡大東日本語派は新潟県・岐阜県・愛知県以東に分布する諸言語からなり、東条操の方言区画による「東部方言」(東条(編)(1953))と一致する。拡大東日本語派は、糸魚川浜名湖線以東の諸言語からなる単系統群「中核東日本語群」を子孫に持つ。この系統群は都竹通年雄の方言区画における「本州東部方言」と一致する(都竹(1949))。八丈語は日琉祖語からの最初の分岐とはみなされず、拡大東日本語派中核東日本語群に属する言語とみなされる。

南日本語派は九州と琉球列島に分布する諸言語からなる。これは服部四郎が提唱した九州・琉球祖語仮説を支持する結果である(服部1976)。琉球諸語は、日琉祖語からの最初の分岐とはみなされず、南部九州の言語(東条操の「薩隅方言」(東条(編)1953))の姉妹言語とみなされる。

この系統樹には、琉球諸語(および八丈語)を除いたすべての日琉諸語からなる単系統群が存在しない。したがって本土日本語なる分類群は(八丈語を含むか否かにかかわらず)側系統群に過ぎず、系統的分類群としては認められない。日本列島の諸言語を対象とした従来の比較言語学的研究の多くは、「本土日本語」あるいは「日本語派」という単系統群を大前提とするが、再考が必要である。

<引用文献>

Atkinson, Q.D. & R.D. Gray (2005) "Curious parallels and curious connections? Phylogenetic thinking in biology and historical linguistics," *Systematic Biology* 54 (4): 513-526.

Bryant, D., F. Filimon, & R.D. Gray, R. (2005) "Untangling our past: Languages, Trees, Splits and Networks," In: R. Mace, C. Holden, & S. Shennan (eds) *The Evolution of Cultural Diversity: Phylogenetic Approaches*. Publisher: UCL Press, pp. 69-85.

Gray, R.D. & Q.D. Atkinson (2003) "Language-tree divergence times support the Anatolian theory of Indo-European origin," *Nature* (426), 435-439.

Lee, S. & T. Hasegawa (2011) "Bayesian phylogenetic analysis supports an agricultural origin of Japonic languages," *Proc. the Royal Society, Biological Sciences*, 278(1725): 3662-3669.

Pellard, Thomas (2015) *The linguistic archeology of the Ryukyu Island*. In: Patrick Heinrich, Shinsho

- Miyara, Michinori Shimoji (eds.) Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use, 14–37. Berlin: DeGruyter Mouton.
- 五十嵐陽介(2016a)「琉球語を排除した「日本語派」なる系統群は果たして成立するのか?—「九州・琉球語派」と「中央日本語派」の提唱—」国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか - 日本言語学史の光と影」第3回共同研究会(京都, 国際日本文化研究センター).
- 五十嵐陽介(2016b)「アクセント型の対応に基づいて日琉祖語を再建するための語彙リスト「日琉語類別語彙」」日本語学会2016年度春季大会(東京, 学習院大学).
- 五十嵐陽介(2017a)「九州・琉球同源語調査票」一橋大学大学院 五十嵐陽介ゼミ「終日ゼミ」発表原稿.
- 五十嵐陽介(2017b)「共通の改新に基づく分岐学的手法を用いた日本語諸方言の系統分類: 南日本語派(琉球を含む)と東日本語派(八丈を含む)の提唱」科研プロジェクト「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」第1回打ち合わせ・検討会(東京, 国立国語研究所)2017年12月24日.
- 五十嵐陽介(2018a)「九州語と琉球語からなる「南日本語派」は成立するか?: 共通改新としての九州・琉球同源語に焦点を置いた系統樹構築」平成30年度琉球大学学長PIプロジェクト「琉球諸語における『動的』言語系統樹システムの構築をめざして」—鹿児島大学公開共同シンポジウム「九州・沖縄におけるコトバとヒト・モノの移動」(鹿児島, 鹿児島大学).
- 五十嵐陽介(2018b)「分岐学的手法に基づいた日本語・琉球語諸方言の系統分類の試み」シンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」(東京: 国立国語研究所).
- 五十嵐陽介(2021)「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」木部暢子・林由華・衣畑智秀(編)『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』pp. 17-51, 東京: 開拓社.
- 木部暢子・林由華・衣畑智秀(編)(2021)『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』pp. 17-51, 東京: 開拓社.
- 東条操(編)(1953)『日本方言学』吉川弘文館.
- 都竹通年雄(1949)「日本語の方言区分けと新潟県方言」『季刊国語』3(1).
- 徳川宗賢(1993)『方言地理学の展開』ひつじ書房.
- 仲間博之・田窪行則・岩崎勝一・五十嵐陽介・中川奈津子(2022)『南琉球宮古語池間方言辞典』国立国語研究所.
- 服部四郎(1976)「琉球方言と本土方言」伊波普猷生誕百年記念会(編)『沖縄学の黎明 伊波普猷先生百年記念誌』沖縄: 沖縄文化協会.(服部四郎(2018)『日本祖語の再建』東京: 岩波書店, 45-81に再掲)
- 平子達也(2018)「外輪式アクセント4方言の複合名詞アクセントに関する資料」『駒澤国文』55, 128-100.
- 平子達也(2020)「尾張木曾川方言の名詞アクセント資料」『南山大学日本文化学科論集』20, 41-60.
- 平子達也・桑畑遥・渡部彩乃(2019)「埼玉県旧入間郡方言の名詞アクセント資料」『駒澤国文』56, 78-57.
- 松浦年男(2020)「天草市本渡方言のアクセント資料(1)」『北星学園大学文学部北星論集』57(2), 93-111.
- 松浦年男(2021a)「天草市本渡方言のアクセント資料(2)」『北星学園大学文学部北星論集』58(1), 29-42.
- 松浦年男(2021b)「天草市本渡方言のアクセント資料(3)」『北星学園大学文学部北星論集』58(2), 93-101.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計31件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 松浦年男	4. 巻 58(1)
2. 論文標題 天草市本渡方言のアクセント資料(2)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北星学園大学文学部 北星論集	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 松浦年男	4. 巻 58(2)
2. 論文標題 天草市本渡方言のアクセント資料(3)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北星学園大学文学部 北星論集	6. 最初と最後の頁 93-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 松浦 年男	4. 巻 158
2. 論文標題 天草市深海方言の漢語に見られる有声阻害重子音	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語研究	6. 最初と最後の頁 29-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11435/gengo.158.0_29	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 佐々木冠	4. 巻 無し
2. 論文標題 不規則性の衰退：日本語方言の動詞形態法で起きていること	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 木部暢子・林由華・衣畑智秀（編）『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』，開拓社	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 五十嵐陽介	4. 巻 無し
2. 論文標題 分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 木部暢子・林由華・衣畑智秀（編）『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』, 開拓社	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 五十嵐陽介	4. 巻 無し
2. 論文標題 日本語諸方言のイントネーションと言語類型論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 窪園晴夫、野田尚史、ブラシャントパルデシ、松本曜（編）『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 開拓社	6. 最初と最後の頁 22-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro Yamada, Yukinori Takubo, Shoichi Iwasaki, Celik Kenan, Soichiro Harada, Nobuko Kibe, Tyler Lau, Natsuko Nakagawa, Yuto Niinaga, Tomoyo Otsuki, Manami Sato, Rihito Shirata, Gijs van der Lubbe, and Akiko Yokoyama	4. 巻 26
2. 論文標題 Experimental Study of Inter-language and Inter-generational Intelligibility: Methodology and Case Studies of Ryukyuan Languages	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese/ Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 249-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Yukinori Takubo	4. 巻 無し
2. 論文標題 Morphophonemics of Ikema Ryukyuan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Kupchik, J., Alondo de la Fuente, J., and Miyake, M. (eds.) Studies in Asian Historical Linguistics, Philology and Beyond, Leiden: Brill.	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松浦年男	4. 巻 22(2)
2. 論文標題 山形県村山方言における声帯振動率の分布	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音声研究	6. 最初と最後の頁 141-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24467/onseikenkyu.22.2_141	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平子達也・桑畑遥・渡部彩乃	4. 巻 56
2. 論文標題 埼玉県旧入間郡方言の名詞アクセント資料	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 駒澤国文	6. 最初と最後の頁 78-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平子達也	4. 巻 7
2. 論文標題 比較方法と日本語諸方言の系統分析 アクセント史研究の観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史言語学	6. 最初と最後の頁 61-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木部暢子	4. 巻 5
2. 論文標題 日本語方言の多様性 - アクセントの地域差 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京外国語大学国際日本学研究報告	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木冠	4. 巻 4
2. 論文標題 千葉県南房総市三芳方言	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 全国方言文法辞典資料集	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kan, Sasaki	4. 巻 -
2. 論文標題 Mitsukaido dialect of Japanese	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Tsunoda Tasaku (ed.), Levels in Clause Linkage: A Crosslinguistic Survey, Mouton de Gruyter	6. 最初と最後の頁 295-352
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松浦年男	4. 巻 55(1)
2. 論文標題 佐賀県北方町方言の外来語アクセントおよび音声実現に関する予備調査報告	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 北星論集	6. 最初と最後の頁 25-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平子達也	4. 巻 94
2. 論文標題 外輪式アクセントの歴史的位置づけについて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ言語文化研究	6. 最初と最後の頁 259-276
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平子達也	4. 巻 55
2. 論文標題 外輪式アクセント4方言の複合名詞アクセントに関する資料	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 駒澤国文	6. 最初と最後の頁 128-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平子達也・友定賢治	4. 巻 -
2. 論文標題 島根県出雲市平田方言	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 全国方言文法辞典資料集(4)活用体系(3)	6. 最初と最後の頁 77-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi, Tomoyuki Kubo	4. 巻 -
2. 論文標題 Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Haruo Kubozono & Mikio Giriko (eds.) Tonal Change and Neutralization. Mouton De Gruyter	6. 最初と最後の頁 83-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計59件(うち招待講演 19件/うち国際学会 16件)

1. 発表者名 松浦年男
2. 発表標題 九州諸方言の与格助詞に見られる音韻交替
3. 学会等名 国立国語研究所プロソディー研究班オンライン研究発表会, オンライン(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 琉球語と九州語が共有する分節音における非中央語的特徴
3. 学会等名 シンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」, オンライン
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 南琉球宮古語伊良部佐和田方言のアクセント体系の初期報告
3. 学会等名 日本言語学会第161回大会ワークショップ「危機方言のプロソディー」, オンライン
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐々木冠
2. 発表標題 拡張コピュラ文述部の形態論
3. 学会等名 シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア 日本の言語・方言の対照研究を中心に」, 国立国語研究所, オンライン
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐々木冠
2. 発表標題 北海道方言の逆使役構文の意味的特徴：クローラによって集めたインターネット上のデータを用いた検証
3. 学会等名 Covid-19の影響下における方言研究のあり方を模索するワークショップ, オンライン(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐々木冠
2. 発表標題 千葉県南房総市三芳方言の格
3. 学会等名 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」2020年度 第1回研究発表会, 国立国語研究所, オンライン
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平子達也
2. 発表標題 伝統方言の記述と比較方法
3. 学会等名 シンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」, オンライン
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平子達也
2. 発表標題 出雲方言の格と情報構造
3. 学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」令和2年度第1回研究発表会 「格・情報構造(本土諸方言)」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 配慮表現の地域差 日本語諸方言コーパス(COJADS)から
3. 学会等名 NINJALシンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」国立国語研究所, オンライン
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 日本列島人の起源と歴史
3. 学会等名 NHK文化センター名古屋教室の講座, オンライン
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 音声コミュニケーションのダイバーシティ - 日本の方言音声について -
3. 学会等名 日本音響学会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木部暢子、中澤光平、横山晶子
2. 発表標題 Grammatical Relations in Japonic
3. 学会等名 AA地理言語学第2回研究会, オンライン
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Celik Kenan・木部暢子
2. 発表標題 Raising language diversity awareness in Japan through web-based open access application
3. 学会等名 The 6th International Conference on Language Documentation & Conservation (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 日本語と琉球語の成立をさぐる - アクセントの比較対照から -
3. 学会等名 第72回日本人類学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 Accent systems in Japanese dialects
3. 学会等名 NINJAL International Symposium. Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 危機言語の記録・保存・復興
3. 学会等名 沖縄言語研究センター40周年記念シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田窪行則
2. 発表標題 How many languages there are in Japan?
3. 学会等名 11th edition of the Language Resources and Evaluation Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田窪行則
2. 発表標題 従属節における係りの深さと受けの広さの相関について
3. 学会等名 第43回関西言語学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田窪行則
2. 発表標題 Mutual Intelligibility as a measure of linguistic distance and intergenerational transmission
3. 学会等名 NINJAL International Symposium. Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田窪行則
2. 発表標題 宮古池間方言の形態音韻論
3. 学会等名 日本音声学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masahiro Yamada, Yukinori Takubo, Shoichi Iwasaki, Celik Kenan, Soichiro Harada, Nobuko Kibe, Tyler Lau, Natsuko Nakagawa, Yuto Niinaga, Tomoko Otsuki, Manani Sato, Rihito Shirata, Gijs van der Lubbe, and Akiko Yokoyama
2. 発表標題 Experimental Study of Inter-Language and Inter-Generational Intelligibility: Methodology and Case Studies of Ryukyuan Languages
3. 学会等名 The 26th Japanese/Korean Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田窪行則
2. 発表標題 ことばと生きる, ことばを残す
3. 学会等名 危機的な状況にある言語・方言サミット(宮古島大会)(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 分岐学的手法に基づいた日本語・琉球語諸方言の系統分類の試み
3. 学会等名 シンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 九州語と琉球語からなる「南日本語派」は成立するか? : 共通改新としての九州・琉球同源語に焦点を置いた系統樹構築
3. 学会等名 平成30年度琉球大学学長PIプロジェクト「琉球諸語における『動的』言語系統樹システムの構築をめざして」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 3拍名詞第4類における本土日本語と琉球語間の1対2のアクセント型の対応について
3. 学会等名 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 琉球語のアクセント
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 Towards an adequate description of the tonal systems of Southern Ryukyuan
3. 学会等名 NINJAL International Symposium. Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 これからの方言アクセント研究がなすべきこと
3. 学会等名 日本語学会2018年度春季大会シンポジウム「日本語記述研究の未来 - 今なすべきこと - 」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐々木冠
2. 発表標題 千葉県南房総市三芳方言の指示詞・代名詞
3. 学会等名 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」平成29年度第2回研究発表会「指示詞・代名詞(本土諸方言)」(国立国語研究所)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐々木冠
2. 発表標題 能格が斜格主語か：関東地方の斜格経験者専用格助詞ガニの位置づけ
3. 学会等名 International Symposium on Japanese Studies "Tradition and Innovation in Changing Japan" (ブカレスト大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐々木冠
2. 発表標題 Where did the suffix-initial /s/ come from?: The story of neo-dialectal spontaneous suffix -sasar
3. 学会等名 International Symposium on Japanese Studies "Tradition and Innovation in Changing Japan" (ブカレスト大学) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐々木冠
2. 発表標題 日本語方言における連体と終止
3. 学会等名 NINJALシンポジウム 「日本語の名詞周辺の文法現象 名詞修飾表現ととりたて表現 」(国立国語研究所)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐々木冠
2. 発表標題 北海道方言における自発語形のゆれ
3. 学会等名 関西言語学会第42回大会 (京都大学)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sanae Tamura, Toshio Matsuura & Yoshihisa Kishimoto
2. 発表標題 On sentence-final particle sa in Hokkaido Japanese
3. 学会等名 The 25th Japanese/Korean Linguistics Conference (University of Hawai'i at Manoa) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Celik, Kenan , Yukinori Takubo, and Rafael Nunez
2. 発表標題 Spatial frames of reference in Miyako: Digging into Whorfian linguistic relativity
3. 学会等名 The 25th Japanese/Korean Linguistics Conference (University of Hawai'i at Manoa) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Takubo, Yukinori
2. 発表標題 The making of the digital museum of Nishihara, Miyako Island
3. 学会等名 NINJAL-NMJH-UHM Workshop "Underdescribed Languages and histories: Linguists' and Historians' Challenges" (University of Hawai'i at Manoa) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田窪行則
2. 発表標題 方言はどこまで通じるか
3. 学会等名 第12回NINJALフォーラム「ことばの多様性とコミュニケーション」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kibe, Nobuko and Hajime Oshima
2. 発表標題 Plural Forms in Yoron-Ryukyuan
3. 学会等名 The 25th Japanese/Korean Linguistics Conference (University of Hawai'i at Manoa) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kibe, Nobuko, Kumiko Sato, Taro Nakanishi and Kohei Nakazawa
2. 発表標題 Copus based study of Japanese dialects: Regional differences in case marking system
3. 学会等名 The Sixteenth International Conference on Methods in Dialectology (国立国語研究所) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木部暢子
2. 発表標題 危機的な状況にある言語・方言の 現状報告 (八丈・奄美・琉球)
3. 学会等名 危機的な状況にある言語・方言サミット(北海道) (北海道大学学術交流会館) (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 平子達也
2. 発表標題 アクセントから見た出雲方言内部の地域差 - 分布と歴史 -
3. 学会等名 日本語学会2017年度春季大会 (関西大学) (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 平子達也
2. 発表標題 比較方法と日本語諸方言の系統分析
3. 学会等名 日本歴史言語学会第7回大会 公開シンポジウム『言語系統論の過去(これまで)と未来(これから)』(大阪学院大学) (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 平子達也
2. 発表標題 出雲方言の格標示について
3. 学会等名 第106回九州大学言語学研究会（九州大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五十嵐陽介
2. 発表標題 共通の改新に基づく分岐学的手法を用いた日本語諸方言の系統分類：南日本語派（琉球を含む）と東日本語派（八丈を含む）の提唱」
3. 学会等名 「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」第1回打ち合わせ・検討会「日本語諸方言の系統関係について」（国立国語研究所）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 青木博史、有田節子、有元光彦、江口泰生、岡島昭浩、荻野千砂子、勝又隆、川瀬卓、衣畑智秀、清田朗裕、久保園愛、東寺祐亮、新野直哉、西村浩子、平子達也、堀畑正臣、前田桂子、松浦年男、村山実和子、森脇茂秀、山本佐和子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 518
3. 書名 筑紫語学論叢	

1. 著者名 Fuyuki Ebata, Shiho Ebihara, Fubito Endo, Yasunari Imamura, Masumi Katagiri, Atsuhiko Kato, Kazuhiro Kawachi, Joungmin Kim, Kazuyuki Kiryu, Masato Kobayashi, Megumi Kurebito, Asako Miyachi, Kan Sasaki, Michinori Shimoji, Satoko Shirai, Kiyoko Takahashi and Tasaku Tsunoda	4. 発行年 2020年
2. 出版社 De Gruyter Mouton	5. 総ページ数 868
3. 書名 Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction with Biclausal Appearance	

1. 著者名 木部暢子、中川奈津子、菅沼健太郎、岩崎真梨子、寺嶋大輔	4. 発行年 2021年
2. 出版社 国立国語研究所	5. 総ページ数 82
3. 書名 青森県八戸方言調査報告書：日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成：方言の記録と継承による地域文化の再構築	

1. 著者名 青井隼人・木部暢子（編），平子達也・久保園愛・山口響史・木部暢子（著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国立国語研究所	5. 総ページ数 193
3. 書名 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究：愛知県木曽川方言調査報告書	

1. 著者名 麻生玲子・山本友美・木部暢子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国立国語研究所	5. 総ページ数 115
3. 書名 椎葉村方言語彙集中間報告書 上椎葉・尾八重・鹿野遊・大河内編	

1. 著者名 木部暢子・山本友美・麻生玲子・新永悠人	4. 発行年 2018年
2. 出版社 国立国語研究所	5. 総ページ数 96
3. 書名 椎葉村方言語彙集中間報告書 仲塔・松尾編	

1. 著者名 衣畑智秀（編）五十嵐陽介、平子達也、衣畑智秀、金愛蘭、橋本行洋、澤田浩子、田中牧郎、平塚雄亮、佐野真一郎、窪田悠介、山東功（著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 基礎日本語学：第1章「現代日本語の音声と音韻」（五十嵐陽介）、第2章「音韻の歴史変化」（平子達也）	

1. 著者名 日本語学会（編）、相澤正夫、青木博史、松永一枝、秋本守英、阿久澤忠、浅田健太郎、浅野敏彦、浅見徹、安達太郎、安倍清哉、天野みどり、荒井隆行、荒井清秀、有田節子、有元光彦、李漢燮、庵功雄、池田証寿、石井久雄、田窪行則、他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京堂出版	5. 総ページ数 1328
3. 書名 日本語学大辞典：「言語学」（田窪行則）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田窪 行則 (Takubo Yukinori) (10154957)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・大学共同利用機関等の部局等・所長 (62618)	
研究分担者	木部 暢子 (Kibe Nobuko) (30192016)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・大学共同利用機関等の部局等・特任教授 (62618)	
研究分担者	佐々木 冠 (Sasaki Kan) (80312784)	立命館大学・言語教育情報研究科・教授 (34315)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松浦 年男 (Matsuura Toshio) (80526690)	北星学園大学・文学部・教授 (30106)	
研究分担者	平子 達也 (Hirako Tatsuya) (30758149)	南山大学・人文学部・准教授 (33917)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関